



# 目次

## 序文

序論 科学史における全体史的方法

第一章 十七世紀の危機と科学革命

第二章 ガリレオ・ガリレイ——近代技術的学知の射程

第三章 フランス革命と科学思想

第四章 ドイツ近代大学建設と科学思想……………三〇七

第五章 ヴァイマル文化と現代数学の始原……………三六一

第六章 マルクスの科学論——その再構成……………三九六

後記……………六三九

索引(人名・事項・文献)

第一節 第二の科学革命の第二幕

第二節 十九世紀プロイセンの大学改革

1 十八世紀ドイツ大学の危機と改革運動

2 フンボルトによるベルリン大学創設の理念

3 近代学グライセンシャフト問のモデルとしての古典文献学

第三節 大学の学問としての純粹数学

1 一八〇〇年前後のドイツの数学

2 ケーニヒスベルク・モデルの形成——純粹数学研究の歴史的背景

3 数学・自然科学の専門学問化・職業化とその背景

4 十九世紀後半に向かって



## 第一節 ヨーロッパの安定の時代とその危機

1 ヨーロッパの昨日の世界——ゲッティンゲン

2 シュベングラーの数学論

3 ヴァイマル期科学思想のスペクトル

## 第二節 数学基礎論論争の展開

1 古典的集合論における数学的存在

2 ブラウワー・ワイルの直観主義

3 ヒルベルトの形式主義

4 ワイルとブラウワーの反批判

## 第三節 数学基礎論論争と哲学者たち

1 現象学的数学論——エトムント・フッサール

2 象徴形式としての現代数学——エルンスト・カッシーラー

3 言語ゲームとしての数学——ルートヴィヒ・ウィトゲンシュタイン

## 第四節 超数学の射程——ゲーデルの不完全性定理

## 第五節 ヴァイマル共和国時代のゲッティンゲン

1 抽象代数学の勃興——エミー・ネーター

2 新しいスタイルの物理学の形成

3 エクソドス——移動する数学セミナー

## 第六節 近代数学の現代的位相——啓蒙の現在



第一節 批判的・学問的社会主义としてのマルクス主義

第二節 マルクスにとっての近代自然科学

